

(雜 錄) ○朝鮮に於ける「シベリアノロジカ」

次に著者は *Ceratomyxa trepanopsettae Auerinczei* に就て追記をなし、就中、膽汁を小管の中に容れ約 15°C. の氷室中に二―三日間入れ置く時は胞子の生成を促進せしむてふ趣味ある記載をなせり。

(“Journ. Parasit.” v. 5, No. 1, pp. 11-16 2 Pl. Sept. 1918.)

(府下中野町蠶業試験場内)

(石川金太郎)

## 雜 錄

### ●朝鮮に於ける「シベリアノロジカ」

朝鮮に普通のノロジカ (*Capreolus bedfordi bedfordi* [THOMAS]) が多く居る事は一般に知れ渡つて居るが、「シベリアノロジカ」 [*C. pygargus pygargus* (PALLAS)] が居ると云ふ事は LYDEKKEER が較く指示して居る以外には餘り一般的に信せられては居ぬ様である(日本の學者は未だ朝鮮をも含む日本動物中に加へて居ぬ)。LYDEKKEER の根據とする所は大英博物館にて得た朝鮮産の一頭の雌が形態大にして何分ノロジカらしくなく「シベリアノロジカ」らしいと云ふ所にあり、それで後者は冬期には滿洲又恐らく北部朝鮮迄も南下すると述べて居るのである。

朝鮮北境會寧の小池奥吉氏から予が預つて居る材料中に會寧附近大徳洞發見の鹿角破片がある。氏は現代のものに非ず古代のものとして註して居るが、如何にも或る程度の舊さのさびを呈して居る。但し洪積世迄溯る程に舊きものであるか否かは勿論判断の限りでは無い。

この鹿角破片はノロジカ屬又角の第一及第二分岐(ノロジカ屬としての分岐番號)間にて折れた上半を示す破片である。ノロジカ屬としては甚だ大形の又角である。今予の手許なる「ノロジカ」及「シベリアノロジカ」の又角と問題の又角破片との若子の測定を示す。比較材料のノロジカ二頭は共に十分成熟したものであり、同じく「シベリアノロジカ」一頭は漸く成熟に達したる許り程の若いものである。勿論又角あるノロジカ屬とだけ云へば性は述ぶる迄もない。

測定(1)は第二分岐(内後枝分岐)の上灣に於ける分岐點より又角幹の頂點迄、同(2)は同分岐點より内後枝の頂點迄、同(3)は同分岐點下二十耗の所に於ける又角幹の最大直徑、同(4)は同箇所に於ける又角幹の周回、同(5)は又角幹頂點下六十耗の所に於ける第二分岐以上又角幹の周回、同(6)は又角幹頂點下二十五耗の所に於ける同周回、同(7)は内後枝頂點下三十耗の所に於ける内後枝の周回である。頂點何耗下の所の周回とせしは第二分岐以上又角幹及内後枝の尖鈍如何を見るためである。單位は凡て耗。

材料	測定		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
	右	左							
ノロヅカ叉角	右	32	50	16	51	—	19	38	
	左	50	33	15	45	—	32	35	
ノロヅカ叉角	右	76	37	16	52	32	21	26	
	左	75	39	19	53	31	22	24	
シベリアノロヅカ叉角	右	30	19	21	59	—	33	—	
	左	27+8 (32±)	22	20	53	—	31	—	
問題叉角	左	71	56	25	67	38	33	32	

測定(1)(2)(3)及(4)はノロヅカ二頭は十分に發育し、シベリアノロヅカ一頭は不十分に發育したものである事を念頭に置いて見ねばならぬ。後者は若きにも拘らず測定(3)及(4)の値が大であり、前者の如くに十分發育したらう曉には一層大なる値を示すであらうの形勢を示して居る。これ後者が形態も叉角も甚だ大である事に相應する。而して問題材料は十分に大なる値を示して居る。測定(6)に於てはノロヅカ二頭は小なる値を示し、「シベリアノロヅカ」及問題材料は大なる値を示す。即ち前者に於ては餘計に細く尖り、後者に於ては餘計に太く鈍いのである。これも叉角の大小に相應するものであらう。測定(5)及(7)に於ては「シベリアノロヅカ」は叉角の枝が若く短くあつて該當する測定をなし得なかつたけれども、ノロヅカ對問題材料の關係に於て矢張り測定(6)に見えた所に平行し

たものがあり、ノロヅカに於ては値が小く、問題材料に於ては値が大きい。殊にノロヅカ第二材料は測定(1)に於て問題材料より大なるにも拘らず、測定(3)及(6)に於て問題材料より小なのである。尖鈍の差は甚だ著しいと云はねばならぬ。之を要するにノロヅカ二頭に見られた如き叉角を唯に大きくした丈では問題材料の如くはならぬ。殊に前者は十分發育したものである。反之「シベリアノロヅカ」一頭に見られた如き叉角を更に大きくすれば問題材料の如きに到達するであらう事は十分に豫期し得る。殊にこの前者は未だ十分には發育せぬものである。

「シベリアノロヅカ」の叉角の一特徴として疣の發育著しい事が述べられてある。LYDEKKE の寫真で見ると二分岐以上の部迄も疣のあるものがある。問題材料に於ても矢張り同様の上方迄疣が見られる。ノロヅカ二頭の叉角では下部に於ては疣がよく發育して居るが、斯く上方迄は疣が無い。一頭では第一分岐附近に疣の上限があり、一頭では一層下方の部に疣の上限が有る。予の「シベリアノロヅカ」材料の叉角は疣の發育悪いが、これは若いから止むを得ぬ。

同屬乃至同亞屬内の種を叉角にて識別しやうなどは危険を伴ひ勝らである事は云ふ迄も無い。併しそれにも自ら程度があり階梯がある。ノロヅカ對「シベリアノロヅカ」の如く大小に甚だしき徑庭ある場合にはさる判断

にも或る程度の概然度が認められて然るべきである。茲に觀察し得た成績の範圍内に於て判断を行ふべくば、問題材料が「シベリア」に屬するの可能度は至つて小く、「シベリア」に屬するの可能度は大きいと云はねばならぬ。

「シベリア」は夏には湖邊沼澤地等の平野を逍遙するが冬には山地の森林に却き、十一月の降雪の頃三百乃至五百の大群に集合して滿洲に移動し、翌春三四月の交再びシベリアに歸來するとの事である。候鳥に對する詞を案出すれば候獸とも云はるべきものである。但し雪の烈しく無かつた一八八二年には大群にも集らず小群に集つた丈で移動しなかつた由である。ノロジカにはこの候獸習性が無い。シベリア並に滿洲と朝鮮とは接壤地である。滿洲に南下する程ならば北部朝鮮の東半部附近にも到來して然るべきである。LYDEKKERの朝鮮産材料は冬毛であつたとある。予は今回の問題材料を見るに附けても、LYDEKKERの所述を暗に放置するの必要無きと思ふ。即ち候鳥が採録される限り候獸たりとも「シベリア」が朝鮮をも含む日本動物名彙中に一座席を與へられて然るべきであらう。

(松本彦七郎)

### ●半水棲象鼻蟲

ゾウムシの一部の成蟲が水面上を運動することに就ては既に SCHULZE CHAMPENOIS, FOWLER, MARSHALL 等

の記述ありて *Bagous*, *Litodactylus*, *Embrychius* 等の成蟲が水上を運動すること知らる。此等のゾウムシの幼蟲は水草を食ひ従て成蟲は水邊に發見せらるゝこと多し。

予はイネゾウムシ *Echinocnemus* sp. の成蟲及ゾウムシ一種 *Triodactylus* sp. の成蟲が水上を運動するを見たり。此等の昆蟲は沼の水邊に棲み前種は水邊の地上を速に歩行すること多し。

此等の昆蟲の體の表面には多くの鱗片を有して水に濡れるを防ぐを以て昆蟲が水上に落下しても體は表面張力ある水の表面を破ることなく體の下面を水面に接して體を水上に保ち全肢の腿節及脛節を水面に接し脛節の先及附節は水中に入り或は水上に在り。又 *Echinocnemus* sp. には口吻の先を水面に接す、甲蟲の體の表面に鱗片の存するは普通なることにして水邊に棲まざる多數のゾウムシ及コガネムシ (*Scarabaeidae*) の一部カツコウムシ (*Cloridae*) の一部等は體に多數の鱗片を有す。従て水邊のゾウムシの鱗片は特に水に適應したものと云ふこと能はず。水面上の前進は次の方法にて行はる、左右の後肢を同時に水面上に後方に動かす時左右の中肢を同時に後方に動かす、之と同時に左右の前肢を前方に動かして水面上を前進す。

*Echinocnemus* は後肢を動かすこと少なけれども前進は甚速なり。多數の半水棲甲蟲例へば水邊のゴキムシ (*Carabidae*) 及水邊のハネカクシ (*Staphilinidae*) 等の大